

ジョグジャカルタのバティック調査報告：第2回  
「アジアにおける自然と社会・文化に関する研究」  
(平成20年度グローバル化の中でのアジアの環境と生活文化：水・土・植物と人の関係を通じて)

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学人文学部・農学部 公開日: 2016-06-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上利, 博規 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10297/9545">http://hdl.handle.net/10297/9545</a>

# ジョグジャカルタのバティック調査報告

第2回 「アジアにおける自然と社会・文化に関する研究」 2009.03.30.

人文学部社会学科人間学 上利博規

## 1 バティック調査について

### (1) バティックとは

- ① 染色技法の一つで、蠟を防染に使うロウケツ染めのこと。
- ② もともとはインドネシアのロウケツ染めを意味したが、現在ではロウケツ染め一般。

### (2) バティックの歴史的背景

- ① 紀元後1世紀前後に、インドからヒンドゥー文化の一つとしての伝わる。
- ② 13～16世紀頃、マジャパヒト王朝時代に、ワヤン・クリなど宮廷文化の一つとして栄えたらしい。
- ③ 16～18世紀頃、マタラーム王朝時代に、イスラームの影響下、およびオランダ東インド会社の影響下で、バティック制作が栄える。
- ④ 19世紀オランダによる直轄統治時代、ビジネスとなる。
- ⑤ 1942～1945年 日本占領下でバティック・ハウコウカイが作られる。
- ⑥ 戦後スカルノ大統領のもとで、バティック・インドネシアが作られる。

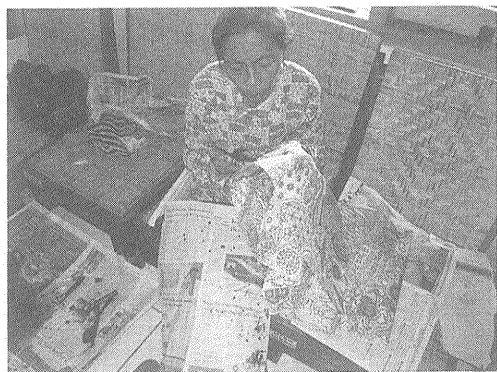
### (3) バティック調査のいくつかの目的

- ① 歴史的問題
  - ・欧米の研究では抜け落ちているオランダ直接統治時代以前のバティックについて調べる。
  - ・バティック・ハウコウカイの現物を見ること、及びインドネシアで果たしていた役割を確認すること。
- ② バティックの現況を調査すること
  - ・バティックの使用状況を街中で調査すること。
  - ・手仕事としてのバティック制作と機械生産との関係を見ること
  - ・自然染色を復活させようとしている人と接触し、話を聞くこと。
- ③ バティック・センター、バティック・ミュージアムなどの施設を訪問し、上記について質問すること。

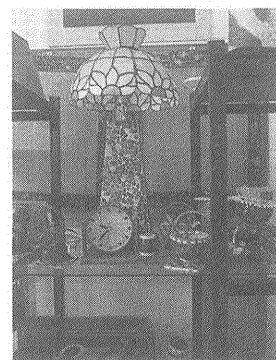
## 2 バティック・センター訪問

### Balai Besar Kerajinan dan Batik (Center for Handicraft and Batik)

#### (1) バティック・センターの工場



チャンティンを使って蠟でバティックに模様を描いているところ



日本人の依頼による手描きのバティック

バティック以外のクラフトによる作品

#### (2) バティック・センターの事務所での話し合い

バティック・センターの事務所で4人の方と2時間近く話し合う。詳細省略



バティックの訓練を受けている高校生たち

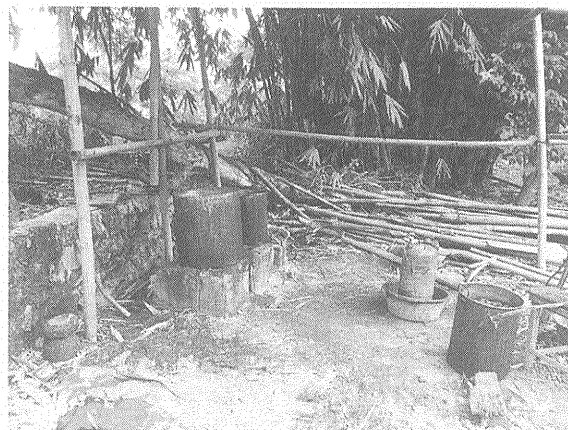
### 3 自然染色を行なっているヘンドリ氏の工房

ジョグジャカルタから車で20分ほど離れたところにヘンドリ氏の工房があり、そこでは十数人が働いていた。

工房には、染色用の植物が庭に植えてあり、染色用の釜で染色をする人、染色したものを乾かす人、チャンティンで蠟防染をする人たちがいた。



ヘンドリ氏の工房の庭の染色用の植物



染色用の釜



染色した布を干す

#### 4 バティック・ミュージアム

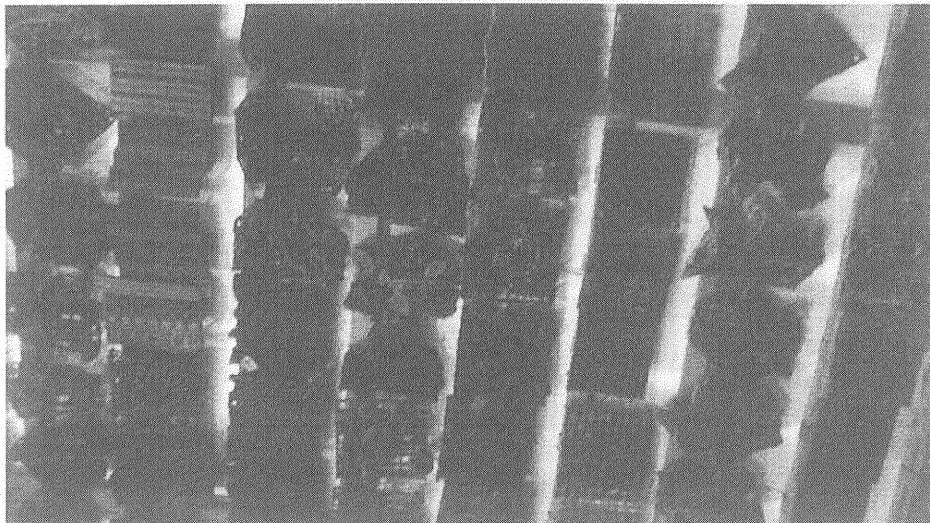
バティック・センターは国立であり、予め調査目的などを記して訪問の申請をしなければならなかった。バティック・ミュージアムも公立のものであると思っていたが、様子からして私設のものかもしれない。



内部には、たくさんのバティックが展示してあり、それぞれの制作年代、制作地などが記されている。撮影禁止なので重要な資料についての映像は示せない。

その他、模様を描く際に使用するチャンティンが、古いタイプのものから様々並べられていたり、顔料やチャップ(捺染の型)などが多数展示してあった。

彼らは英語がほとんど話せず、説明しようとしてくれたが、ほとんど内容的にはわからなかった。



捺染用の型(これは撮影が許可された)

## 5 調査結果

詳細は、『アジア研究』4号(人文学部、2009.3)所収の「インドネシアのバティックに見る手仕事の変遷と現代」として論じたので、ここでは初期の調査目的に対する結果のみを簡単に以下に示す。

### (1) 歴史的課題

#### ① オランダ直接統治時代以前のバティック

意外にも、バティック・センターの人でさえ、バティックを欧米の研究者たちの意見をもとにして組み立てているので、それ以上の答えは得られなかった。

#### ② バティック・ホウコウカイについて

バティック・ホウコウカイの現物はバティック・ミュージアムでいくつか見ることができた。しかし、上記のように、彼らは欧米研究をもとにして語っているので、彼らからそれ以上のことを聞くことは無理であった。

日本のみならず、オランダや中国も半ば強制的にバティックを作らせたという歴史があるが、ジャワの人たちはそうした政治的観点をもっていないようである。

### (2) バティックの現況

#### ① バティックの使用状況

バティックを手描きで行なっている人は、少なくともジョグジャカルタにはほとんどいない。バティック・センターや、一部のバティック生産者に限られ、あとはプリントである。

#### ② 自然染色については、ジョグジャカルタにはヘンドリ氏以外にはほとんどいない。一部藍染を行なっている工房に行き話を聞くことができた。

結論は、バティックは世界のどこにでも見られる繊維産業と同じ機械生産へとほとんど移行しているということであり、生活の欧米化の進行に伴い、日本の着物ほどではないにしても、若者のバティック離れが進んでいる、ということである。



繁華街であるマリボロ通りには、まだたくさんのバティックのお店や露店が並んでいる。